

法律救済ナレタルトノ異議アル時ハ
其規則及ヒ批觸ヲ為シタル事實

丙 法律ノ救済ニ因リ事實ヲ確定シテ
遺漏ニ若クハ之ヲ証明シタリトノ異
議アル時ハ其事實

四 一定ノ要求

其他上告状ハ準備不周ノ普通規則ニ從ヒ
ニ左ノ條付ヲ記載ス可シ

五 三ノ(乙)及ヒ(丙)ノ場合ニ於テハ必要ナ
ル立証方法

此要件ヲ遺漏スルニ上告ヲ為スニ影響ヲ及
ボサス

第十條 上告状ニハ救済金ノ請取若クハ償納

猶豫ノ時許ヲ受ケアルノ証ヲ添付ス可シ
若シ之ヲ添付セサル時ハ上告ハ之ヲ為サ
ルニト者做ス可シ

第十一條 始審裁判所ニ於ケル初審ノ通常手
續ノ規則ハ之ヲ上告ニ適用ス但左ノ救済ニ
於テ例外ノ規則アルモハ此限ニ在ラス

第十二條 上告状ハ裁判長ノ定メタル大審院
裁判官ヨリ本案ノ審査ヲ受クルモノトス

第十三條 左ノ場合ニ於テハ審査ヲ為スヘキ
大審院裁判官ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ上
告ノ不受理ヲ言渡ス可シ

一 上告期限ヲ經過シタルヲ判断タレカ
若クハ上告ヲ許ス可クサレ時

二 上告状第九條、三 基キタル異議者
々ハ訴音ヲ具有セサル時

第十四條 上告者ハ上告不受理ノ言渡ヲ為シ
タル命令ニ對シ命令ノ送達ヨリ起算シテ十
四日ノ期限ニ異議ヲ申立ルヲ得

第十五條 異議ノ申立ヲ為ス以前上告者ハ償
納猶豫特許ヲ得サル限リハ第二ノ敗訴金ニ
十四ヲ各記ノ字ニ納ル可シ

第二ノ敗訴金ノ返付若クハ其上納金ニ償納
猶豫特許ヲ受ケタル原被告ヨリ後日追納ノ
義務ニ付テハ第七條第三項一ノ場合ヲ除ク
ノ外其第一項第二項及七條第三項ノ規則ヲ通
用スル裁判ヲ取消シタル場合ニ於テハ第一

第二ノ敗訴金共ニ之ヲ返付ス可シ

第十六條 異議申立状ニハ大審院ハ上告ニ付
キ口頭對審ニ基キ裁判ヲ為ス可シトノ論決
ヲ記載ス可シ

第十七條 異議申立状ニハ第二ノ敗訴金ノ請
取又ハ償納猶豫特許ヲ受ケアルノ証ヲ添付
ス可シ但償納猶豫特許ノ証ヲ上告状ニ記載
シタル時ハ此限ニ在ラズ

若シ又テ添付セサル時ハ異議ノ申立ヲ為サ
ズルモノト看做ス可シ

第十八條 審査ヲ為ス可キ大審院裁判官ノ上
告ヲ受理シ若クハ不受理ノ命令ニ對シ上告
者ヨリ異議ヲ申立テタル時ハ上告状ノ謄本

ヲ被上告者ニ送達ニ十四日ノ期限ハ答申
答ヲ差出サシム可シ

第十九條 答辯答ハ準備答面ノ普通規則ニ準
依リ且一定ノ要件ヲ記載ス可シ

第二十條 上告狀ノ送達ヲ受ケタレ被上告者
ハ上告ニ附従スルヲ得

上告附従ハ之ヲ答辯答ニ説明ス可シ若シ其
答面中第九條三ノ規則ニ基キタレ異議若ク

ハ論決ヲ掲ケテハ時附従ハ法律上其効ナキ
モトス其他被控訴者控訴ニ對シ附従スル

ノ規則ヲ適用ス

第二十一條 答辯答ニ上告附従ノ説明ヲ為シ
クハ時ハ答辯答ノ謄本ヲ上告者ニ送達ニ十

四日ノ期限ニ其答辯ヲ為サシム可シ

第二十二條 答類ノ交換ヲ終リタル後裁判長
ハ專任裁判官ヲ命ズ可シ專任裁判官ハ裁判

ヲ為スニ必要ナル諸証ノ事実及ヒ法律上ノ
關係ノ明細答ヲ答類ニ基キ七日内ニ調製ス

可シ其明細答ニハ法律上ノ判断ヲ掲ケ可ク
ス

其後口頭對審ノ期日ヲ指定ス可シ

記録ヲ通告スルハ除交換答類外ニ專任裁判
官ノ報告答ノ謄本ヲニ檢察官長ニ通告ス可

第二十三條 口頭對審ハ專任裁判官其報告答
ニ付テ演述ヲナスヲ以テ始マレトス

兩造ハ正誤若クハ補充スルヲ得其言語ハ
論決ノ理由トナルモノトス

檢察官長ハ常ニ其意見ヲ説明ス可シ

第二十四條 職権ヲ以テ審査ス可キ争点ノ外

ハ上告状ニ因リ若クハ答弁書ニ於ケル上告

附従ヲ以テ提起シタル異議ニ非サレハ大審

院ノ審査ヲ受ケザルモノトス

異議ノ追加又ハ新ナル異議ノ提出ハ之ヲ許
サス

第二十五條 裁判ヲ為スル際大審院ハ控訴裁

判所ニ於テ裁判ノ基因トナリタル事實ニ拘

束サレ、モノトス此事實ノ外必要ナル証

規則ノ抵触ヲ証明スル為メ若クハ法律ニ及

シタル権利義務ノ確定ヲ証明スル為メノ資

料トナルヘキ事實及ヒ立証方法ニシテ各面

ニ掲ケアルモノニ非サレハ之ヲ取上ケザル

モノトス

第二十六條 立証ヲ必要トスル時ハ大審院ハ

之ヲ余ス可シ大審院ハ其意見ニ因リ自ら檢

証ヲ為シ若クハ他ノ裁判所ヲシテ之ヲ為サ

シムルヲ得

第二十七條 上告ヲ相陪ナリト看認スル時ハ

原裁判ノ取消ヲ為ス可シ

手續ノ必要ナル規則ニ抵触アルカ為リ裁判

ヲ取消シタル時ハ其抵触アリタル手續ニ限

リ之ヲ取消ス可シ

第二十八條 裁判ヲ取消シタル時ハ次條ノ規
則ヲ除クノ外審理及ヒ裁判ノ為リ本案ヲ控
訴裁判所ニ移ス可シ
控訴裁判所ハ審理及ヒ裁判ヲ擔任ス可シ新
ニ為ス裁判ハ新ナル口頭對審ニ基キ之ヲ為
ス可シ此口頭對審ニ於テ兩造ハ取消サレリ
ル裁判ノ基キタル口頭對審ニ於テ提出シ得
可カリシ事實ヲ申立ツルヲ得
控訴裁判所ハ大審院ニ於テ裁判取消ノ理由
ト為シタル法律上ノ判断ヲ標準トナシ且新
ナル審理及ヒ裁判ノ理由トナスノ義務アリ
トス

第二十九條 左ノ場合ニ於テ新事實ヲ確定ス

ルヲ要セサル時ハ大審院ハ裁判ヲ取消シ得
ル本案ヲ裁判ス可シ

- 一 一定シタル事實ノ關係ニ付キ法律ノ
適用ヲ為スノ際ニ於テ法律ノ收損ア
リタルカ為リ裁判ヲ取消シ且其事實
上終審裁判ヲ為スノ場合ニ至リタル
時

- 二 受理スヘキ訴訟ニ非ラサル為リ若ク
ハ裁判所管轄違ナルカ為リ裁判ヲ取
消シタル時

第三十條 裁判ノ理由ニ付キ法律ノ收損アル
時ハ地ノ理由ニ因リ裁判正當ナル場合ト爲
モト告ヲ棄却ス可シ

第三十一條 上告不當ナラス若クハ証據充分

ナラスト者做ス時ハ之ヲ棄却ス可シ

第三十二條 兩席裁判ハ之ヲ為スルヲ得ス

兩造口頭對審ノ初期若クハ後期ニ兩席ニシ

ル時モ亦大審院ハ各類ニ基キ裁判ヲ為ス可

シ

第三十三條 左ノ場合ニ於テハ控訴規則ハ上

告ニモ亦之ヲ適用ス

一 兩席裁判ニ對スル故障ノ規則(第二章

第一條第一項第十三條第三項)

二 上訴ノ願下及ヒ上訴ヲ為サストノ契

約ニ関スル規則(第二章第二十三條)

三 兩造ヨリ為ス上訴ノ手續及ヒ上訴ト

故障トシ同時ニ為スノ手續ニ関スル規則

四 上訴期限及ヒ其受理不受理ノ調査先

ニ此要件ノ一ヲ遺漏シタルニ因リ上

訴ヲ受理スルカラストシテ裁判ヲ以

テ之ヲ棄却スルノ規則(第二章第二十

八條)

五 一部分ノ裁判言渡ノ規則(第二章第三

十六條)

六 上訴ヲ為シタル原被告ニ不利益ナル

裁判ヲ為ス可ラサル規則(第二章第三

十七條)

七 各類ノ差支又ハ要求及ヒ返却ニ関ス

ル規則第二章第四十四條

但七ノ場合ニ於テハ左ノ規則ニ従リ可シ
水栗ヲ控訴裁判所ニ接シタル時ハ記録ヲ立
十ニ控訴裁判所ニ送リ候セテ初審ノ裁判
所ニ通示ス可シ大審院ニ於テ自ラ水栗ノ裁
判ヲ為シタル時ハ控訴裁判所ハ裁判者ノ謄
本ヲ受テ可シ

第四章 再審

第一條

左ノ場合ニ於テ初審若クハ控訴ニ因
リ裁判確定シテ終結シタル手續ハ取消ノ訴
願ニ因リ再審セララルノトアルモノトス

一 裁判ヲ為スヘキ裁判所成規ノ如ク列
席セサル時

二 法律上裁判官ノ職務ヲ行フ能ハサル
裁判官裁判ニ立會又ハ之ヲ為シタル
時但忌避ノ請願若クハ上訴ニ因リ四
避忌避ノ原因其成果ヲ失フタル時ハ
此限ニ在ラス

三 裁判官忌避セラレ且忌避ノ請願相當
ナリト申渡アルニモ拘ラス裁判ニ立

會又ハ之ヲ為シタル時

四 原被告訴訟ニ於テ法律規則ニ從ヒ代人ヲ立テサル時但明諾若クハ黙諾ヲ以テ他人ニ訴訟ヲ為サシメタル時ハ此限ニ在ラス

第二條

左ノ場合ニ於テハ初審若クハ控訴ノ裁判ニ對シ正理ノ原目ニ因リ再審ノ訴願ヲ為スヲ許ス

一 訴訟ニ関シ刑法ニ照シ職務上犯罪ニ係レル裁判官裁判ニ立會ヒタル時

二 原被告ノ法律上代人若クハ訴訟代人又ハ對手人若クハ其法律上代人若クハ訴訟代人訴訟ニ関シ刑法ニ觸ル可

キ所為ヲ犯シタルカ為メ原被告ニ不利益ナル裁判アリタル時

三 裁判ノ基キタル書類ヲ偽造シ若クハ増減変更シタル時

四 証人又ハ鑑定人又ハ証人トシテ質問ヲ受ケタル對手人裁判ノ基ク陳述ニ付キ又ハ通事裁判ノ基ク通訳ニ付キ宣誓ヲ為シ偽証ノ罪ヲ犯シタル時

五 裁判ノ基キタル刑事ノ宣告詔罪法第三百三十九條以下ノ手續ニ於テ他ノ確定シタル刑事ノ宣告ニ因リ取消トナリタル時

六 原被告他ノ訴訟ニ於テ同一訴訟物件

ニ付キ以前ニ確定ノ言渡アリタル裁判ヲ發見シ其裁判次回ノ裁判ト齟齬スル時

七 原被告自己ノ利益トナル裁判ノ基クヘキ書類ヲ發見シ之ヲ使用スルヲ得ル時

一乃至四ノ場合ニ於テ再審ハ刑法ニ觸ル可キ所為ニ因リ確定ノ裁判アルカ若クハ檢察官他ノ理由ニ因リ証據不充分ナルカ為メ刑事訴訟ノ起訴又ハ執行ヲ為シ得ヘカラサルヲ証明スル時ニ非レハ之ヲ為スヲ得ス
第三條 再審ハ原被告其過失ニ非スレテ以前ノ訴訟ニ於テ殊ニ故障又ハ控訴ニ因リ再審

スル原因ヲ提出シ能ハサリシ時ニ非レハ之ヲ許サス

第四條 提出アリタル再審ノ原因之ヲ必要トスルニ非サレハ訴訟ヲ再審スルヲ得ス

第五條 再審ノ訴訟ニ付テハ前裁判ノ言渡ヲ為シタル裁判所ニ非レハ之ヲ管轄スルヲ得ス

同一事件中一部ハ初審ニ於テ一部ハ控訴ニ於テ為シタル数多ノ裁判ニ對シ訴願ヲ為ス時ハ控訴裁判所ノ再審訴訟ノ全部ヲ管轄ス

治安裁判所ノ催促命令手續ニ於テ為シタル弁償命令ニ對スル再審ノ訴訟ハ弁償命令ヲ

言渡しタル治安裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第六條 再審ノ訴願ハ三十日ノ期限内ニ之ヲ為ス可シ

此期限ハ原被告再審ノ原因ヲ知り得タル日ヨリ之ヲ起算ス

原被告再審ノ原因ヲ裁判言渡以前ニ知り得ルト虽モ前訴訟ニ於テ之ヲ提出シ得サリシ時ハ裁判確定ノ日ヨリ期限ヲ起算ス

五年ヲ経過シタル後ニ在テハ再審ノ訴願ヲ起スルヲ得ス代理委任ノ欠漏ニ基ク再審ニハ前三項ノ規則ヲ適用セズ此場合ニ於テハ訴願期限ハ原被告若クハ其訴訟能力ヲ有セサル場合ニ於テハ其法律上代人送達又ハ他

ノ方法ニ因リ裁判ノ言渡ヲ知り得タル時ヨリ之ヲ起算ス

第七條 原被告債納猶豫特許ヲ受ケサル限りハ再審ノ訴願ヲ起スニ付キ敗訴金十円ヲ書記局ニ豫納ス可シ

敗訴金ノ返付又ハ其上納并ニ債納猶豫特許ヲ得タル原被告ノ後日追納ノ義務ニ付テハ第三章第七條ノ規則ヲ適用ス

第八條 再審ノ訴願ヲ為スニハ審理裁判ヲ為ス可キ裁判所ニ書面ヲ出ス可シ
治安裁判所ニ屬スハキ訴願ハ書記ノ調書ニ記載セシム可シ

第九條 再審ノ願書ニハ左ノ條件ヲ記載ス可

一 再審ヲ請願スル前ノ裁判言渡書

二 再審ヲ為ス可キ理由ノ説明

三 再審ノ原因ノ明細

其他訴状ハ準備書面ノ普通規則ニ從ヒ殊ニ左ノ條件ヲ具有ス可シ

四 再審ノ原因及ヒ法律上ノ期限ノ超過

ヲ明白ス可キ立証方法

五 裁判取消ノ程度ノ説明及ヒ本案ニ付

キ他ノ裁判ヲ為スヘキ申立ノ説明

四及ヒ五ニ掲ケタル要件ヲ遺漏スルモ再審

ノ訴願ヲ為スニハ影響ヲ及ホサ、ルモノト

ス

第十條 再審請願書ニハ敗訴金完納ノ受取若

クハ債納猶豫特許ノ証ヲ添付ス可シ

若シ之ヲ添附セサル時ハ再審ヲ為サ、ルモ

ノト看做ス可シ

第十一條 左ノ數條ニ於テ例外ノ規則ナキ限

リハ再審ノ訴願ニハ訴訟ノ審理ヲ為スヘキ

裁判所ノ手續ニ関スル規則ヲ適用ス

第十二條 再審ハ請願書ヲ以テ法律上ノ期限

内ニ再為サ、ルヲ明白ナル時若クハ元來相

當ナル再審ノ原因ヲ記載セサル時ハ訴訟指

揮上ノ命令ニ因リ之ヲ棄却ス可シ

棄却ノ命令ニ對シテハ抗告ノ上訴ヲ許ス

第十三條 前條第一項ニ掲ケアル外口頭對審

前ニ於ケル再審訴願本案ノ審査ハ之ヲ為ス
トヲ得ス

第十四條 請願書ニ記載セサル再審ノ原因ハ
其提出ノ時第六條ニ定メクル期限経過セサ
ル場合ニ非サレハ後日之ヲ提出スルトヲ得
ス

第十五條 再審ノ對手人ハ本案ノ對審中控訴
ニ許シクル範圍ニ於テ新事實及ヒ立証方法
ヲ提出スルトヲ得但此事實及ヒ立証方法ハ
再審ヲ申立テクル裁判ノ部分ニ関スルモノ
ニ限ル

第十六條 再審請願者ハ對手人ノ説明アルニ
拘ラス再審ノ原因及ヒ法律上期限ノ遵守ヲ

証明スヘキ事實ヲ申供ス可シ

第十七條 期限内ニ提出セサル再審若クハ元
來不當ノ再審ハ職権ニ因リ裁判言渡ノ式ヲ
以テ之ヲ棄却ス可シ

第十八條 再審ノ訴願ヲ期限内ニ為シ且其元
來相當ナル時ハ裁判所ニ於テ訴訟ノ或ル点
ニ付キ各別ノ審理ヲ為スノ権マルニ拘ラス
訴願ノ受理共ニ本案ニ付キ新舊對審ノ結果
ニ因リ裁定ヲ為スモノトス

第十九條 再審請願者ノ不利トナル可キ裁判
ノ変更ハ對手人ヨリ再審ノ訴願ヲ提出シ其
申立ヲ為スニ非サレハ之ヲ許サス

第二十條 大審院ノ裁判ニ因リ終結シタル訴

訟ニ對シテモ亦再審ヲ請願スルヲ得
此訴願ノ管轄ハ左ノ裁判所ニ專屬ス

一 第一條三乃至七ノ原因ニ基キ再審ヲ
請願シタル時ハ控訴裁判所

二 第一條又ハ第二條一及ヒ二ノ原因ニ
基キ再審ヲ請願シタル時ハ大審院

再審大審院ノ管轄ニ屬スル時ハ上告手續ノ
規則ヲ適用ス大審院ハ其事實ノ確定ヲ争ヒ
又其斟酌ニ関スル場合トモ再審ノ原因及
ヒ其受理ニ付キ審理ヲ終結ス可シ

第二十一條 再審ニ付キ為レタル裁定ニ對シテ
ハ訴訟ノ裁判ヲ為タル裁判所ノ裁判ニ對シ
一般ノ規則ニ從ヒ上訴ヲ許ス場合ノモノニ

限リ上訴ヲ為スヲ得

此裁定ニ對シテハ第二條六及ヒ七ノ原因ニ
基キ更ニ再審ヲ請願スルヲ得ス

第五章 抗告

第一條

抗告ハ此法律ニ於テ特別ニ掲載セル
場合及ヒ其他左ノ場合ニ於テ上訴トシテ為ス
コトヲ得

一 訴訟ノ審判手續ニ関レ原告ノ請願
ヲ却下シタル判決(裁判及ヒ命令)ニ対
スル場合

二 強迫執行ノ手續ニ付キ為シタル判決
(裁判及ヒ命令)ニ対スル場合但判定ハ
口頭對審ヲ用ヒスニテ為スヲ得且ツ
此法律ニ於テ此判決ニ対シ抗告ヲ為
スヲ許サスト明記セラザル場合ニ
限ル

第二條 抗告ハ一級上等ノ裁判所ニ於テ之ヲ

判定ス

抗告裁判所ハ裁判所ノ職權ヲ以テ整理ス可

キ訴訟ノ審判手續上ノ缺漏ニ関スル抗告ニ

非ラサル限リハ之ヲ審査スルニ止ルモノト

ス

第三條 抗告ノ申立ハ此法律ニ明文アル場合

ヲ除クノ外期限ナキモノトス

第四條 抗告ハ其不当ノ判決ヲ為レタリト認

メラレタル裁判所ニ各面(抗告状)ヲ出シテ之

ヲ為スモノトス但本案訴訟治安裁判所ノ審

理中ナル時又ハ証人、鑑定人又ハ証各若クハ

物件ヲ臨檢ニ供出ス可キ義務アリト言渡リ

レタル第三者抗告ヲ為ス時ハ口頭ヲ以テ裁

判所各記ノ調卷登載ニ依リ之ヲ申立ルヲ

得

第五條 抗告ヲ申立ル時ハ新事実及ヒ新証據

方法ニ依ルヲ得

第六條 抗告ハ復々裁判官ノ再考ヲ求ルカ為

メニ為スヲ得

不當ノ判決ナリト認メラレタル裁判所其抗

告ヲ熟考シ新ニ提供スル所ノ事実及ヒ証據

方法ニ基キ抗告ヲ相当ナリト認ル時ハ其不

當ノ点ヲ除正スルヲ得之ヲ相当ト認メサル

時ハ三日ノ後意見ヲ付シ又適當ノ場合ニハ

調卷ヲ添ヘテ抗告裁判所ニ送付ス可レ

合議裁判所ニ於テハ列席裁判官各負ノ為シ
タル訴訟指揮上ノ命令ニ對シテ申立タル抗
告ニ付テハ之ヲ抗告裁判所ニ送付スル以前
ニ於テ會議ヲ開キ議決ヲ為ス可シ

第七條

抗告ノ申立ハ此法律ニ特ニ記載セル
場合ニ限り執行ヲ猶豫スルノ効力ヲ有ス
不當ノ判決ヲ為シタリト認メタル裁判所
ニ於テハ又ハ裁判長ハ抗告ニ對スル判定ア
ルマテ本案裁判ノ執行ヲ中止スルコトヲ命
スルヲ得
殊ニ其裁判ヲ直ニ執行スル時ハ追復ス可カ
ラサル損害ヲ成ス可キモノニ限り之ヲ命ス
可シ

第八條

抗告ハ止ムヲ得サル場合ニ於テハ直
ニ抗告裁判所ニ申立ワルヲ得
抗告裁判所ニ直ニ抗告ヲ為スニ付キ期限
ヲ定メアル時ハ其期限ヲ守ル可シ止ムヲ得
サル場合ニ非ラサル抗告ニ付テモ亦同シ
抗告裁判所ハ抗告ノ判定ヲ為スノ前ニ下級
裁判所ノ意見及ヒ其一件各書類ヲ請求シ又ハ
臨時ニ命令ヲ為スコトヲ得殊ニ前條第三項
ノ場合ニ於テハ抗告ヲ為シタル本案判決ノ
執行ヲ猶豫ス可キ旨ヲ命スルヲ得
第九條 抗告ハ會議ヲ開キ之ヲ判定スルヲ例
トス

抗告者ト及對ノ利益ヲ有スル者ニハ各面ヲ以

ヲ其及討ノ意見ヲ述ヘシムル為メ抗告ノ申
立ヲ通示シテ事實ノ弁明ヲ命シ又ハ自ラ弁
明セシムルヲ得

裁判所各記ニ就テ調各記載ニ依テ抗告ヲ為
レタルモノニ付テモ同シ

抗告裁判所ハ口頭對簿ノ為メ訴訟關係人ヲ
呼出スルヲ得

第十條

抗告裁判所ハ其期限ヲ守ル可キ抗告
ニ付テハ屢シテ期限ヲ守リアル乎又其取上
リ可キモノナル乎ヲ審査スルヲ要ス
若シ抗告右ノ要件ニ缺漏アル時ハ不当トシ
テ却下ス可シ

第十一條

抗告ハ之ヲ受理ス可ク且其理由アル

ルモノト認ム可キ時ハ抗告裁判所ハ意見ヲ
以テ自ラ必要ナル處分ヲ為シ又ハ不当ノ判
決ヲ為シタル裁判所ニ付シテ其處分ヲ為サ
シム可シ

抗告裁判所ノ判定ハ下級裁判所ニ於テ之ヲ
宣告ス可シ但抗告裁判所ニ於テ別ニ規則アル
レハ此限ニ在ラス

第十二條

下級裁判所ハ其本案訴訟ニ付テハ
抗告裁判所ノ判定ニ従フ可シ

第十三條

抗告裁判所ノ判定抗告者、對手人
又ハ其他ノ關係人ニ於テ更ニ抗告ヲ為ス可
キ特別ナル理由アル時ニ限り第二ノ抗告ヲ
為スヲ得

第二ノ抗告ハ抗告裁判所ノ上級ナル裁判所ニ於テ判定ス但抗告ノ期限又ハ執行中止ノ効力ニ付テノ規則ハ第二ノ抗告ニモ之ヲ適用ス可レ

第二ノ抗告ニ対スル判定ニ付テハ更ニ上訴スルヲ許サス

第十四條 受命又ハ受託ノ裁判官受訴裁判所ヨリ立証又ハ其他ノ訴訟上ノ処分ニ付テ依託セラレタル場合ニ於テ為レタル判決ヲ改正セシメコトヲ望ム時ハ先ノ本案ノ受訴裁判所ノ判決ヲ請求シ此判決ヲ以テ抗告ヲ申立ルヲ得

條ノ規則ハ之ニ関係ナキモ

ノトス

明治三十七年八月二十六日装綴

紙数五百五枚

二百十五

總計 二 一 件

調

| | |
|----|-------|
| 主任 | 米田富次郎 |
| 補助 | 柏原安之助 |
| 同 | 淺井圖南 |
| 同 | 彌 |
| 同 | 松本録治 |

